

ねぐら ツバメの埒はヨシの中



渡良瀬遊水地の夕暮れ (9/10 17:50)



渡良瀬川を低空で横切るツバメたち (18:10)



ヨシの上空すれすれを飛ぶツバメ (18:15)

参考写真：「ツバメのねぐら入り (2006年9月)」
東京新聞HPより転載 (撮影：堀内洋助)

2008年9月10日午後6時、渡良瀬遊水地に日が沈むと同時に、それは突然やってきた。

東の空から舞い降りてくるもの、渡良瀬川の水面すれすれに低空飛行でやってくるもの、おそらく**数万を越えるツバメの集団**が、夜、寝るための場所(埒：ねぐら)に帰ってきたのだ。

ツバメたちは、最初は上空を覆うようにばらばらに飛んでいる。やがて、密度が高くなってくると、竜巻が渦を巻くように、ひと固まりとなり、それ自体が一つの生きもののように、薄暗い夕方の空をのたうち回る。これが数分続いたかと思うと、突然、急降下してヨシの茂みの中に姿を消すのだ。そこが今日のねぐらとなるのである。この頃には、辺りはすっかり闇に包まれている。ツバメが出現してから、きっかり**20分間**に起こった出来事なのであった。

子育てを終えた親ツバメは、今年巣立った子ツバメとともに、**エサの豊富な広い湿原**へとやってくる。そして、狭い範囲に集団ねぐらを形成するのだ。集団ねぐらをつくる生物学的な理由は明らかではないが、たくさん集まることによって、捕食者に襲われた時に逃げ切れる確率を高くするため、などという説もある。ツバメのねぐらの中でも、**国内最大規模**のものがこの渡良瀬遊水地にあるのだ。例年は遊水地の北側であることが多いが、今年は8月の雨で、北側のヨシが水没してしまったせいか、遊水地の東側のヨシ原をねぐらとしている(下の写真)。

ツバメたちは、9月下旬から10月上旬頃まで、日本で暮らしているが、やがて、熱帯から南半球にかけて地域へと移動し、そこで冬を過ごし、翌年、また日本に戻ってくる。軒下で子育てするツバメたちには、こんな姿もあったのである。



↑今年のツバメのねぐら(印を付けた辺り)